

2022年10月9日 主日礼拝

説教題「エクソダス（脱出）」出エジプト記 14 章 15～22 節

主任牧師 加藤 誠

**「イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを歩き、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。」(出エジプト記14章19～20節)**

モーセに率いられたイスラエルの民がエジプトを脱出した物語を読んでいます。「出エジプト記」は英語で「エクソダス (Exodus=脱出)」と訳されますが、主なる神はイスラエルの民をどこからどこに向かって「脱出」させようとしたのか。「何からの脱出」「どこに向かう脱出だったのか」。それが今朝のテーマです。

モーセとアロンにより、エジプトの王ファラオの説得によりやがて成功したイスラエルの民は意気揚々とエジプトを出発し荒れ野の旅に踏み出しますが、目の前に紅海が広がる海辺に宿営している時に、後ろから土煙を挙げてエジプトの精鋭の戦車部隊が襲いかかってきてパニックに陥ります。「いったい何のために我々を荒れ野に連れ出したのか！」と食ってかかる人びとにモーセは言います。「恐れることはない。落ち着いて、今日、あなたたちのためになされる主の救いを見なさい」と。

そしてモーセが神の杖をもった手を海に差し伸べますと、強い東風が吹いてきて海は割れ、イスラエルの民は渴いた地を通っていくことができたのでした。それを追ってエジプトの戦車部隊が迫るのですが、それまでイスラエルの先頭にいた神の御使いが移動して彼らの後ろに回り、同じように雲の柱も後ろに立ったので、エジプト軍が追いつこうとしても決して近づくことができないという不思議なことが起こります。イスラエルの民は若い者からお年寄りまで、さまざまな年齢の者たちが旅に加わっていたのですが、たぶん足の早い人は先頭を引っ張り、足の遅い人たちはだんだん後方に遅れていったことでしょう。体の不自由な人、杖を突いて歩くお年寄り、小さな子どもの手を引く親たち、子どもや病人を背負って歩く者たちは、隊列の最後尾に遅れていったのではないかと想像されます。それを追いかけるのは、人間よりもはるかにスピードの速い馬たちの戦車部隊です。勝負は目に見えていました。イスラエルの人々が逃げおおせるわけがないのです。ところが神の奇跡が起こります。先頭にいた神の御使いが一番後ろに回り、雲の柱も後ろに回って、エジプト軍の戦車部隊が決して近づくことができないように守ったのでした。

わたしはここに、エジプトという国を「脱出」して、イスラエルの民が目指すように神さまから招かれている「新しい世界 (神の国)」が示されていると思います。エジプトという国は力と富が支配する社会です。絶対的権力を持つファラオが神のごとくに君臨し、ファラオが首を縦に振るか横に振るかで人びとの命の価値が決められていく社会です。エジプトのピラミッドに関する資料によると、クフ王という最大のピラミッドの建造には1000キロ離れたナイル川流域の花崗岩が625万トン

も用いられており、それを切り出しで運ぶためには、10万人の奴隷が20年間働かされた計算になるのだそうです。途方もない労働量です。奴隷たちに有無を言わず働かせるだけの絶対的権力をファラオはもっており、ファラオの下で奴隷一人の命はレンガ一つ程度の重みの「使い捨て」の命のように扱われたのです。そのような社会から「エクソダス（脱出）」して、神の国に向かう旅。それが出エジプトの旅でした。そしてイスラエルが招かれた神の国とはどういう国か。社会の中で一番足の遅い人たち、荒れ野を旅したならば一番後ろをゆっくりと歩かざるを得ない、最後の一人ひとりの命を、神の御使いが一番後ろで支え、守る国です。

主イエスは「ブドウ園の労働者」のたとえで、朝から晩まで12時間働いた人と夕方1時間しか働けなかった人に対する神さまの愛を語っておられます。人間の社会は「人は労働しただけ評価され、12時間働いた者は1時間働いた者よりも高い報酬を受ける」仕組みでないと回りません。そこに人間の原罪（弱さ）、限界があるわけですが、しかし神の国は違います。主イエスは「わたしは最後の一人にも同じようにしたいのだ。あなたはその主人の気前良さをねたむのか」と問いかけておられるように、神の国は「最後の一人が大切なひとりとして尊ばれる国」です。

イスラエルの人々はこの紅海の奇跡を体験した後、荒れ野で「十戒」をはじめとする戒めを受け取っていきますが、そこには「あなたはエジプトで寄留者（奴隷）であったのだから、寄留者の気持ちを知っている。だから新しい土地では寄留者をあなたの同胞と同じようにもてなさない」と語りかけられています。神さまがどれほど慈しみ深く、憐み深い方であるかを実体験した者として、同じ立場の人たちと神の慈しみと憐れみを分かち合って生きなさいという勧めです。ここにも「エクソダス（脱出）」の方向性が明確に示されています。力や富で人間が人間を支配し、価値づけ、その尊厳を奪っていく社会から、お互いに自分の弱さを覚えあい、支え合っていく神の国への招きが示されているのです。

にもかかわらず、イスラエルの民はこのあと、神の「エクソダス（脱出）」の招きに応えることに失敗していきます。人間は、苦しみがのど元を過ぎ去り、生活が安定しだすと、神さまの憐みと慈しみを簡単に忘れてしまい、自らの保身に走り、隣人への分かち合い、寄留者たちを大切にもてなすことを忘れ、結局、荒れ野を導いた神さまに背を向けて、生活の豊かさと安定を約束する偶像の神の礼拝へと傾いていきます。聖書がなぜこんなに分厚いのか。聖書の分厚さは私たち人間の罪の分厚さです。何度も何度も神さまから慈しみを受けながらも、簡単に背を向けてしまう私たちの罪の分厚さが聖書を分厚くしているのです。しかし、それだけではありません。その私たちをそれでも追い求め続け、大切な御子イエス・キリストを送ってまで私たちを神の国の祝福に招き、今日も救い出そうとしておられる、その神さまの愛の真実の分厚さを、聖書は証しているのです。